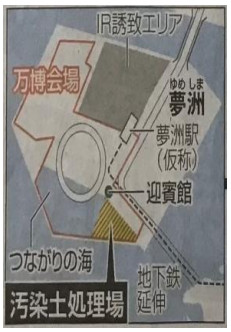
万博会場に汚染土処理場

大阪・関西万博の会場計画が大きく変更される。環境アセスメントにも重大な影響を及ぼすものだ。表題タイトルで伝える産経 15 日朝刊の記事を抜粋して紹介する。

夢洲で「憩いのエリア」をうたっていた水面を計画から 25%削減して一部を埋め立て、会場の造成工事で出た汚染土の処理場とすることが 14 日、関係者への取材で分かった。土壌汚染は昨年 1 月、市の調査などで判明し、処理方法を調整していた。夢洲は昭和 52 年、建設残土や廃棄物の処分場として整備を開始。総面積約 390 ㌶で、市内の河川工事で出た土砂を搬入して埋め立てを行ってきた。155 ㌶が万博会場となり、(基本)計画では、会場南側の水辺を「ウォーターワールド」と命名。「水景を活用した憩いのエリア。水辺に面して飲食施設を配置するとともに、水上イベントの舞台としても活用」するとしていた。



関係者によると、地面に変更する場所には、パビリオン建設などの工事で出た土砂を運び込み、他の場所に移すことなく万博開催を迎える。会場そばでは大阪メトロ中央線を延伸して夢洲駅(仮称)を設置することになっているが、この工事に関連して昨年 1 月、土壌汚染対策法の基準値を超えるヒ素やフッ素が検出された。同法に基づき、工事現場に隣接する多くのエリアの土砂が汚染土として扱われている。

汚染土処理場の目の前には各国の VIP を歓迎し、接待する場として活用する迎賓館が建設される。関係者からは景観を心配する声も上がる。「ウォーターワールド」については、博覧会協会が 13 日、大部分の名称を「つながりの海」に変更すると唐突に発表。水面としていた 47 ㌶のうち、東側の 12 ㌶を地面にするとした。

大阪市は夢洲内で出た土砂について、周辺道路の渋滞緩和などのため島内で処理するルールを運用している。今後、工事の進展で大量の土砂が出るため、「ウォーターワールド」の一部を処理場として使うことになったという。コンクリートで固めた上で来年 2 月までに水抜きなどを行い、同 3 月から汚染土を含む土砂を搬入するとしている。搬入される土砂は少なくとも数十万㌧になるという。関係者は「最終的にどのぐらいの量になるか分からない。小さな丘くらいの高さでなく、山積みになると隣接する迎賓館からの景観もよくない」とする。

一方、夢洲の水辺では大阪市立自然史博物館が令和 2 年夏に実施した調査で大阪府では絶滅したと判断されていた水草「カワツルモ」が再発見された。自然保護団体や研究者から保全を求める声も強く、大阪港湾局は一部を夢洲内の別の場所などに移していた。会場内の土砂処理場について、水位を調整してカワツルモを保護する場所として活用する方針という。

(2022 年 7 月 18 日)